

東アフリカにおけるイスラーム知識人

平成 16 年入学

派遣先国：タンザニア

派遣先機関：Zanzibar Islamic Heritage

藤井 千晶

キーワード：イスラーム知識人，預言者の医学，東アフリカ，薬草，悪魔

派遣先機関の概要

派遣先機関は、ムハンマド・イドリース氏（Mohammed Idris Mohammed Saleh）が運営する Zanzibar Islamic Heritage である。ムハンマド・イドリース氏は現地の研究者であり、1934 年、ザンジバル生まれのコモロ人である。氏は現在、クルアーン学校の教師をしており、自宅をオフィスとした私設のマドラサ救済組織（Islamic Madrasat Relief Organization）を開設している。氏は 1964 年のザンジバル革命後、本土からのキリスト教徒の流入や政府のイスラームの組織や知識人の活動に対する取り締まりにより、ザンジバルのかつての「良き」イスラーム文化が失われつつある、と嘆く。そのため、氏の活動はザンジバルのイスラーム文化の保存を目的としている。氏はザンジバルのイスラームに関する貴重な文献の収集や、自ら資料の作成に努めており、ザンジバルにおけるイスラームの歴史の変遷及び現代の様子を知る上で、最も重要な情報提供者であるといえる。

派遣先志望動機と、派遣前に設定した目標について

報告者は、東アフリカの預言者の医学（クルアーンと預言者ムハンマドの言行録に加え、預言者の生きた時代の伝統的な治療実践に基づいて行われる医療）の位置づけとその社会的役割を明らかにすることを目的としていたため、派遣先であるザンジバルを志望した。ザンジバルは現在の東アフリカ沿岸部の中でもイスラーム学の中心地の一つである。また、預言者の医学は、東アフリカ沿岸部のイスラームの知識人の活動を知る上で重要なテーマであると考えられた。

派遣前に設定した目標は、預言者の医学の社会的位置づけを明確にすることである。ザンジバルにおいて、どのような治療所があるのか、それぞれの治療所はどのような役割、特性があるのかを調べ、その中での預言者の医学の位置づけや存在意義を明らかにすることを目標としていた。

派遣期間中の活動について

派遣期間中は、預言者の医学の治療以外にも、ザンジバルの医療の全体像を捉えるため、様々な治療機関を訪れ、インタビューをおこなった。ザンジバルには広く人々に受け入れられている西洋医療の他、中国医療、韓国医療、スクマ族の薬学による医療に加え、教会での牧師による治療、クルアーン学校などでのイスラーム指導者による治療、白魔術や黒魔術などをおこなう伝統医療が存在することが分かった。やはり西洋医学が人々の絶大な信用を得ているが、その中でも預言者の医学は、イスラーム的に正しい治療として、また西洋医学では治すことのできない病いを治す医療として、人々の需要を得ていることが分かった。

預言者の医学に関する調査は、クルアーン学校での治療行為や授業内容の参与観察が主である。クルアーン学

校でのイスラーム教師による治療は、人々に苦痛を与えるシェタニ（悪魔）を防いだり除去したりする治療を主としている。処置室にあたる部屋では、クルアーン朗唱のカセットテープがスピーカーから大音量で流され、身体に宿ったシェタニを除去するため、人々は足をマッカ（メッカ）の方向に伸ばして座っている。また、カセットテープを聞くよりも効果的な方法として、教師が片手で患者の目を覆い、その手で患者の頭を前後に揺らしながら、耳元で直接クルアーンを唱える場合もある。別室では、治療の前段階である診察のために充てられる。女性患者の多くが、腹部の不調や夫婦生活の悩みを訴えていた。問診や触診が行なわれ、シェタニが原因と診断されると先に触れた別室でのクルアーン朗誦を勧められ、さらに独自に調合した薬が渡される。

預言者の医学に関する授業もおこなわれている。女性のみが受ける授業では、毎回二百人程が集まり、聴衆は学校の外まで溢れる。授業では夫婦生活や、イスラームでは不浄とされている女性の身体を清潔に保つ方法など、日常生活に関わりの深い内容が取り上げられている。



写真1 患者にクルアーンのCDを聞かせて悪魔払いをする診療所



写真2 預言者の医学の薬を売る露天商

派遣先で印象に残った体験や経験

派遣先で印象に残ったのは、報告者自身の悪魔払いの体験である。悪魔払いをされる患者は、耳元で、大声でクルアーンを朗唱される。報告者はこれまで鼓膜が破れる程大きな声を耳元で叫ばれたことがなかったので、非常に驚いた。体中から汗が出て、反射的に治療者から耳を遠ざけようと、必至になった。また、悪魔を頭に登らせる（憑依させる）方法として、鼻から大根の葉の汁や香油を入れる場合もある。これも報告者は試してみるようにと勧められ、体験をしたが、鼻の奥の痛みから反射的に涙が溢れ出し、鼻から液体を入れられる不快感から、叫び声をあげそうになった。このようなことをされると、誰もが報告者と同じような反応を示すのではないかと思うが、報告者も悪魔を「持っている」のかもしれないと、不安になった。

目標の達成度や反省点について

目標としていたザンジバルにおける医療の全体像をつかむことと、その中での預言者の位置づけを明確にする点は達成したと考える。ザンジバルには様々な病いを治療する場所があるが、預言者の医学は西洋医学では対処できない悪魔による病いをイスラームに沿った形で治療するという点で、その存在意義は大きい。また、薬草を売る店では、百種類以上の薬をサンプルとして採取し、その効能や使用方法などを学び、預言者の医学で使用される薬草の全体像を掴んだ。さらに、預言者の医学による治療所が多く存在することやクルアーン学校やモスクでの預言者の医学に関する授業など、調査前には予想していなかった発見があり、今後さらに預言者の医学が盛んにおこなわれるであろうという確信を得た。反省点は、調査の最終段階において、時間がなくなり、十分にインタビューができなかったことである。毎回起こることではあるが、今後は数日間の時間の余裕をみて調査を進めていきたい。